

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K08130

研究課題名(和文) 地域再生に資する拠り所としての伝統的な祭祀空間のマネジメントに関する研究

研究課題名(英文) A study on management of traditional ritual space as a base to contribute to regional revitalization

研究代表者

上甫木 昭春 (Kamihogi, Akiharu)

大阪府立大学・生命環境科学研究科・客員研究員

研究者番号：70152858

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：鹿児島県のモイドンに対する文化財指定が、モイドンの管理や住民への周知に寄与していることや、祭りの継続のためにはモイドンの管理単位を広げることの必要性を明らかにした。奄美渡島のノロ祭祀が集落行事に集約するという祭祀の変化に対し、ミヤーに公民館が建てられる、小学校を活用するといった祭祀空間の変容が確認された。川平の御嶽は共通して閉鎖的な空間形態を成しており、神司や御嶽を中心とした祭事を閉鎖的に執り行うことで伝統が継承されていた。対して、竹富では御嶽の空間形態や維持管理形態は様々で、祭事についても神司や神事関係者を中心のものから村人総出の芸能、公民館行事など合理的な組織運営により伝統が継承されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

衰退が進む国内の伝統的な祭祀空間に対し、鹿児島(モイドン)、奄美大島(ノロ)、八重山(御嶽)での事例研究を通じて、地域再生に資する保全のあり方を提示した。

研究成果の概要(英文)： Designating cultural property for Moidon contributes to the management and recognition of residents to Moidon and it is necessary to expand the management unit for Moidon to continue the festival of Moidon. The village events as “the respect for the elderly festival” and Noro religion such as “the harvest festival” were gathered, to reduce the burden on local resident and to invite gallery. Moreover, it was confirmed that miya(a central plaza) and toneya(a religious hut) were not only easy to maintain but also utilized. Utaki has a closed space form and the tradition was inherited by the closed rituals of “Tsukasa” in Kabira. On the other hand, there are various types of space and maintenance of Utaki, and rational operations such as a rituals for Tsukasa and several related parties, an entertainment for all the villagers and events of community center were performed in Taketomi.

研究分野：ランドスケープ

キーワード：祭祀空間 地域コミュニティ モイドン ノロ 御嶽

1. 研究開始当初の背景

人口減少時代に突入し、地域再生を進めていくことが求められており、そのための拠り所となる場の存在が必要である。祭祀空間は、地域の拠り所として、地域コミュニティの再生、自然生態的インフラの保全、地域の経済活動の再構築への寄与といった多様な機能を有している。伝統的な祭祀空間として、鹿児島県のモイドン、奄美大島のノロ祭祀、八重山の御嶽（ウタキ）などがあげられ、これらの地域は過疎地域に位置しており、地域再生がより強く求められている。そこで本研究では、これらの地域を対象として、地域再生に資する地域の拠り所となる伝統的な祭祀空間のマネジメントのあり方を探ることを研究課題とした。

2. 研究の目的

(1) モイドンに係わる課題と研究目的

モイドンとは、鹿児島県に残る民間信仰の対象となっている森や樹木で、古くから集落の核となる存在として地域住民により祀られている。近年はモイドンの消失が進んでいることから、今後の保全や継承のあり方の検討が課題となっている。そこで、モイドンに係わる研究目的は下記の二つである。

モイドンに対する文化財指定の効果と継承課題の解明：指宿市における指定文化財のモイドンを対象として、モイドンの立地環境・空間構成や植物相、祭りなどの伝統行事、管理活動の変容を把握するとともに、モイドンに対する住民意識を探る。

モイドンの祭りをはじめとする伝統行事の継承課題の解明：指宿市において、モイドンの祭りをはじめとする運営規模の異なる複数の伝統行事の存続状況を、行事の実施場所と行事に対する住民意識から把握する。

(2) ノロ祭祀に係わる課題と研究目的

15世紀に琉球王国より奄美群島にもたらされた女性祭司「ノロ」を中心に執り行われる祭祀「ノロ祭祀」は、1970年代以降、ノロの高齢化や後継者不足によってノロ不在となる集落が相次ぎ、奄美大島におけるノロ祭祀は消滅寸前となっており、ノロ祭祀文化の保全や継承のあり方が問われている状況にある。そこで本稿では、奄美大島における祭祀空間の構成とその活用状況との関係より、ノロ祭祀およびその祭祀空間の継承状況を明らかにすることを目的とする。

(3) 御嶽に係わる課題と研究目的

八重山の御嶽を悉皆的に調査した牧野（1990）は、村社会の変貌や祭祀を担う神司（ツカサ）の転居・後継問題などにより、御嶽の存続が危機的状況にあることを報告している（引用文献[1]）。それから20年以上が経過する今日においても、御嶽や御嶽にかかわる祭事が存続している地域が存在している。そこで本稿では、沖縄県八重山諸島において伝統的な祭祀空間「御嶽」とその祭事が存続された地域を対象に、御嶽の空間と維持管理の実態、祭事と御嶽の関係や祭事と住民とのかかわりの実態を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) モイドンに係わる研究方法

モイドンに対する文化財指定の効果と継承課題の解明に関する研究方法：現地調査により、地形条件、空間構成要素の配置、植物相を記録した。また、各モイドンの管理者や行政担当者へのヒアリング調査により、モイドンの祭りや敷地内での地域活動、清掃などの管理内容、保全施策などを把握した。これらの内容を昭和30年前後に実施された調査記録（引用文献[2]）と比較し、変容を把握した。さらに、モイドンに対する意識を、文化財指定のモイドンが位置する集落の全世帯を対象にアンケート調査で把握した。

モイドンの祭りをはじめとする伝統行事の継承課題の解明に関する研究方法：モイドンは、門（かど）とよばれる藩政以来の農村の小規模な同族集団の神として祀られている。ここでは、運営規模の異なる伝統行事間での住民の関わりや意識の違いを把握するため、門単位の伝統行事であるモイドンの祭りに加え、集落や小学校区の単位で実施されている伝統行事を調査対象に設定した。各伝統行事について、指宿市内の6集落を対象に、実施状況（場所・内容）を集落の公民館長やモイドンの管理代表者へのヒアリングから把握するとともに、行事に対する住民の関わりと今後のあり方についての意識を各集落の全世帯を対象としたアンケート調査から把握した。

(2)ノロ祭祀に係わる研究方法

先行研究(引用文献[3])より、ノロ祭祀における祭祀空間(聖地)には、集落毎の差異は認められるものの「カミヤマ(オボツヤマ)」「カミミチ」「ミヤー」「トネヤ」「イジュン」「アシャゲ」の6つがあげられる。本研究では、比較的近年にノロ祭祀の調査が実施された奄美大島北海岸に位置する奄美市大熊(ダイクマ)、根瀬部(ネセブ)、大和村津名久(ツナグ)、大棚(オオダナ)、名音(ナオン)の5集落を対象に、奄美大島におけるノロ祭祀および祭祀空間の継承状況を調査するとともに、これらを継承させる要因を明らかにするため、1)昭和期までのノロの所在およびノロ祭祀に係わる文献調査、2)近年の奄美大島のノロ祭祀調査状況に詳しい有識者へのヒアリング調査、3)現地における祭祀空間の所在確認調査、4)ノロ関係者へのヒアリング調査、を実施した。

(3)御嶽に係わる研究方法

八重山の御嶽に関する既往研究(引用文献[1][4])および事前の現地踏査に基づき、八重山において大津波等の影響を受けずに古い伝統が残り御嶽と伝統的な祭事が存続している、石垣市の川平(石垣島)、竹富町の竹富(竹富島)と干立(西表島)の3地域を対象とし、継承実態を明らかとするため、1)3地域の御嶽や祭事に関する文献調査、2)御嶽の空間的特徴に関する現地調査、3)御嶽や祭事の継承に関わる公民館組織や祭事関係者へのヒアリング調査を実施した。なお、対象とした御嶽は現地調査やヒアリングが可能であった15箇所の御嶽とし、対象とした祭事は3地域の公民館が発信する行事予定から、川平26件、竹富24件、干立29件とした。

4. 研究成果

(1)モイドンに係わる研究成果

モイドンに対する文化財指定の効果と継承課題 :文化財指定による指宿市の支援として、「管理費の支給」と「補助事業」が確認された。これらの支援により、清掃等の日常管理や危険樹木の伐採がなされ、モイドンの維持が図られていた。また、アンケート調査の結果より、モイドンを「文化財指定後に知った」との回答が一定の割合を占めていたことから、文化財指定がモイドンの存在を広めることに寄与していることが示唆された。今後は、指宿市内の他のモイドンや鹿児島県内でモイドンの分布が多い錦江町等でも文化財指定を広げていくことが、モイドンの保全につながると考えられる。

一方、モイドンに関わる複数の祭りの合併や内容の簡素化が進んでおり、祭りや管理の継続が困難になってきている実態が明らかとなった。今後の継承の方向性としては、管理者の規模の拡大が必要であり、これを推進するためには、特に若い世代に対してモイドンの認知度や理解を一層深める必要があると考えられる。

モイドンの祭りをはじめとする伝統行事の継承課題 :モイドンをはじめとする門の伝統行事では、個人の敷地が主要な実施場所となっているが、集落や小学校区単位の伝統行事では、公民館や広場が主要な実施場所として使用されていた。アンケート調査からは、モイドンの祭りには、モイドンの運営門の中でも限られた人が参加しているため、現状の実施単位では継承が難しくなっていることが示唆された。門の祭りは、管理単位を集落に拡大することや、実施する場所の公共的な空間整備が必要であると考えられる。また、集落や小学校区の伝統行事には多くの世帯が参加していたが、20~50歳代の比較的若い世代が今後の実施に問題を感じている傾向が明らかになり、伝統行事の意義の普及が課題であると結論づけられた。

(2)ノロ祭祀に係わる研究成果

物理的な継承状況をみると、カミヤマは5集落、ミヤー、トネヤがそれぞれ4集落であり、これらは比較的継承されやすいといえるが、活用状況をみると、ミヤーは現存する4集落で活用されているのに対し、トネヤは3集落、カミヤマに至っては全く活用されていなかった。カミミチは2集落で継承、活用は津名久のみであり、本研究の調査全般においてカミヤマからカミミチを経て海に繋がるという一連の祭祀空間の構造についての言質が得られなかったことより、カミミチ自体が消失寸前であることに加え、ノロ祭祀空間の本質の継承も途絶えつつあることが捉えられた。このような物理的継承と活用との差に影響する要因として、ノロ不在後にそのままノロの祭りとして継承される大熊や津名久では、ノロ不在後もトネヤを集落のパブリックスペースとして活用することで、カミミチ(津名久のみ)-トネヤ-ミヤー-土俵という祭祀空間同士の繋がりが保たれ、結果としてノロ

祭祀そのものの集落内継承に貢献しているといえよう。

一方で、ノ口の在・不在に関わらず、全ての行事をそのまま継承することは困難であり、大熊における豊年祭（十五夜）と敬老会、大棚の豊年祭（十五夜）とアラセチのように、集落を挙げての重要な行事を集約せざるを得ない状況に置かれている。これらの行事には多くの人々が訪れるため、琉球由来の「相撲（現地ではシマ相撲と呼ぶ）」を見れるよう配慮されている。このことより、例えノ口祭祀が集落の行事に転じようとも、豊年祭相撲を執り行う「豊年祭（十五夜）」「九月九日豊年祭」は今後も継承されるといえ、同時に開催の場となるミャーが持つ地域の拠り所としての役割を果たし続けると予想される。

以上、本研究において、祭祀空間の構成とその活用状況との関係を分析した結果、ノ口祭祀が集落行事に集約するという祭祀の変化に対し、ミャーに公民館が建てられる、小学校を活用するといった祭祀空間の変容が確認された。これは、祭祀と祭祀空間が相互に関係しつつ、公を担う役割に変容し、結果として集落全体を文化的空間として保全することに寄与しているといえる。

(3) 御嶽に係わる研究成果

御嶽は、「鳥居」「イビ」「香炉」を基本的な空間構成として共通している。地域別に着目すると、川平四嶽は同様の構成要素であるのに対し、竹富は六山・村御嶽・その他で構成要素が異なり、干立の3御嶽も構成要素が異なる。さらに、川平では他地域にない「立入禁止看板」を有すること、竹富では多くの御嶽に「説明板」を有し、「イビ門」を有さず「拝殿」と「イビ」が隣接し「灯籠」を配するなど内地の神社に近い形態をとるものも存在すること、干立では干立御嶽以外の2御嶽では、簡素なつくりとなっていることなどが特筆される。

一方、御嶽の維持管理として、竹富の個人管理2御嶽を除いて市・町有地となり、川平四嶽、竹富の六山は氏子管理、村御嶽は公民館により管理、その他は神司を中心とした個人が管理を行う。干立の穀御嶽は個人管理であったものが公民館管理に変化しており、総じて個人管理の御嶽は簡素な空間構成となっている。これらのことより、川平では氏子を中心とした閉鎖的な空間管理を行い、竹富では御嶽の位置づけにより維持管理組織が異なる合理的な空間管理がなされていること、干立では個人管理の性格が強いが、公民館が底支えしていることが明らかとなった。

祭事と御嶽の関係は、川平では川平四嶽それぞれで行う祭事が6割を占め、群星御嶽など限られた御嶽で行う祭事を含めると9割近くが御嶽で行う祭事であるのに対し、竹富では7割程度、干立では2割程度が御嶽で行われていた。他方干立では、公民館や村内のオープンスペースなど非伝統的空間で行う祭事が3割以上を占め、島内のマラソンなど村以外の空間で行う祭事も御嶽で行う祭事と同程度に周知されていることがわかる。さらに、3地域の祭事を執り行う主な主体の割合をみると、川平ではすべての祭事に神司がかかわり、約半数近くの12件が神司のみで実施し、近年の新規居住者も運営に参画する祭事は、1件のみであった。これに対し、竹富は神司と神事関係者の割合が最も多く、干立では公民館を中心とした村人が運営の主体となるものが最も多くなった。このことから、川平は御嶽での神司を中心とした閉鎖的な祭事が多く、竹富では神司や神事関係者が御嶽で行う祭事を中心に、村人総出の芸能や公民館行事なども執り行われていること、干立では神司や御嶽がかかわる祭事はごく限られていることが示された。

以上より、川平における御嶽は関係者以外の立ち入りを明確に拒絶した空間となっており、神司や御嶽を中心とした祭事を閉鎖的に執り行うことで伝統が継承されていた。対して、竹富では簡素な御嶽の形態から内地の神社のような空間形態を持つものまで維持管理も様々で、祭事についても神司や関係者中心のものから村人総出の芸能、公民館行事など合理的な組織運営により伝統が継承されていた。また干立では神司を中心とした個人管理の御嶽で行う祭事を、公民館や村人が参画する村内外の祭事に取り込む形で継承しており、3地域で御嶽や祭事の継承スタイルが異なることが明らかとなった。

<引用文献> [1] 牧野清（1990）八重山のお嶽、あ～まん企画、682pp。 [2] 鹿児島県立指宿高等学校郷土研究部（1956）：指宿地方のモイドンの調査：薩南民俗 8、8-21 [3] 湧上元雄（1974）：沖縄・奄美の民間信仰，明玄書房，47-58pp，78-81pp [4] 湧上元雄（2000）沖縄民俗文化論 祭祀・信仰・御嶽、榕樹書林、589pp。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 上田萌子、浦出俊和、大平和弘、押田佳子、上南木昭春	4. 巻 82巻5号
2. 論文標題 鹿児島県指宿市におけるモイドン等に関する伝統行事の存続状況と継承課題の把握	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 567-572
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 上田萌子、大平和弘、押田佳子、浦出俊和、上南木昭春	4. 巻 81巻5号
2. 論文標題 鹿児島県指宿市有形民俗文化財に指定されたモイドンの保全に関する現状と課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 565-570
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 押田佳子、松尾あずさ、浦出俊和、上田萌子、大平和弘、上南木昭春	4. 巻 81巻5号
2. 論文標題 奄美大島におけるノ口祭祀空間の継承状況に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ランドスケープ研究	6. 最初と最後の頁 571-576
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 松尾あずさ	4. 巻 239
2. 論文標題 沖縄県竹富島西塘御嶽の大晦日年越し行事	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西郊民俗	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 押田佳子	4. 巻 Vol.4
2. 論文標題 奄美大島のノロ祭祀にみる神宿る風景の継承	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 風景計画研究	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 上田萌子・大平和弘・押田佳子・浦出俊和・上甫木昭春
2. 発表標題 鹿児島県指宿市有形民俗文化財に指定されたモイドンの保全に関する現状と課題
3. 学会等名 日本造園学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 押田佳子, 松尾あずさ, 浦出俊和, 上田萌子, 大平和弘, 上甫木昭春
2. 発表標題 奄美大島におけるノロ祭祀空間の継承状況に関する研究
3. 学会等名 日本造園学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上田萌子・浦出俊和・大平和弘・押田佳子・上甫木昭春
2. 発表標題 鹿児島県指宿市におけるモイドン等に関わる伝統行事の存続状況と継承課題の把握
3. 学会等名 日本造園学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大平和弘
2. 発表標題 八重山地域のオン（御嶽）にみる祭祀と空間の継承方法の現状と課題
3. 学会等名 伝統的な祭祀空間における緑研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小池真琴・押田佳子
2. 発表標題 奄美市名瀬における都市整備が地域信仰に及ぼす影響に関する研究 大熊，有屋地区を対象として
3. 学会等名 平成30年度日本大学理工学部学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上田萌子
2. 発表標題 鹿児島県錦江町周辺における「モイドン」の立地と存続状況に関する研究
3. 学会等名 伝統的な祭祀空間における緑研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 上田萌子
2. 発表標題 鹿児島県指宿市におけるモイドンの存続状況と課題
3. 学会等名 伝統的な祭祀空間における緑研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

上田萌子・大平和弘・押田佳子・上南木昭春：モイドン等の文化資源の調査結果報告，地域交流セミナー「文化資源から地域のつながりを考える」，指宿市考古博物館時遊館Coccoはしむれ，2019
上田萌子・上南木昭春・宮武佳史：鹿児島県錦江町周辺における「モイドン」の立地と存続状況に関する研究，錦江町研究報告会，錦江町役場，2016

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川田 佳子 (押田佳子) (KAWADA Keiko) (10465271)	日本大学・理工学部・准教授 (32665)	
研究分担者	上田 萌子 (UEDA Moeko) (10549736)	大阪府立大学・生命環境科学研究科・助教 (24403)	
研究分担者	浦出 俊和 (URADE Toshikazu) (80244664)	大阪府立大学・生命環境科学研究科・助教 (24403)	
研究分担者	大平 和弘 (OHIRA Kazuhiro) (90711169)	兵庫県立大学・自然・環境科学研究所・講師 (84501)	
研究協力者	松尾 あずさ (MATUO Azusa)		